

公園をみる・観る



= 市販の卵からウズラのヒナ誕生 =

6月のある日、まだ孵化して間もない小さなトリが園長の健康診断を受けに来ていた。

それは孵化後30日のウズラのメスであった。驚くことにこのヒナは、スーパーで普通に売られている10個詰めのパックの中のひとつが孵ったもの。市販されているニワトリやウズラの卵はそのほとんどが無精卵で孵ることはない。ごくまれに有精卵が混じっていることがあり、卵掛けご飯を食べようとして、卵を割ると未成熟なヒナが現れたと言う話を聞いたことのある人もおられるだろう。そんな卵を引き当てた人は、卵掛けご飯を食べられなかったことについてはアンラッキーだったが、ある意味ラッキーな人なのかも知れない。

さて、前述のスーパーで売っていた10個詰めパックのウズラの卵からヒナを孵すことに成功したのは、宇部市の小学4年生のK君。彼は当公園では知る人ぞ知る熱心なリピーター少年である。昨年度から子どもレンジャークラブのメンバーともなり、自然観察に励んでいる。生来トリ好きな彼は常々「鳥を飼いたい」と思っていた。しかし野生の鳥は鳥獣保護法の規定により特別の許可無く飼うことは出来ない。そこで公園のWレンジャーに相談したところ、「スーパーの卵売り場で常温の状態で売られているウズラの卵の中に運がよければヒナに孵ることの出来る有精卵があるかもしれない」という情報を得た。5月の連休に入ったころ、お母さんに頼んでウズラの卵を買ってきてもらったK君は、Wレンジャーの指導を受けながら「ウズラの卵を孵してヒナを育てよう」プロジェクトを開始した。まず、発砲スチロールの箱に電気アンカを入れ、その上にバスタオルを敷いて卵を並べた。温度と湿度に気をつけながら注意深く観察を続けた。卵を温め始めて4日目、暗いところで懐中電灯で照らしてみる（検卵）と、ひとつの卵の殻の中が黒く浮かび上がって有精卵であることがわかり、K君はこのプロジェクトの成功に手応えを感じた。そして5月下旬、K君の努力が実ってめでたくヒナが誕生した。K君は孵ったヒナを「うっちー」と名付け可愛がっている。



ウズラのうっちー

K君が学校に行っている間はお母さんが、お母さんが手の取れないときはおばあちゃんが卵の面倒を見てくれたという。トリは殻から出たとき最初に見たものを親と思い、その後を追い慕う習性がある。うっちーが孵化したとき彼女が最初に目に



したものは、K君のお母さんだった。その日からK君のお母さんはうっちーのお母さんにもなられた様子。そうなるとうっちーの兄ちゃんであり、おばあちゃん？……あ～あ、やっぱりおばあちゃんだ。

この日、園長の発育診断の結果は「良好。良く育っているよ」とのお墨付きがでた。K君とお母さん・おばあちゃんの連携プレーが見事に報われたのだ。

生まれたヒナの可愛さに気を良くしたお母さん、その後通販で10個の有精卵を購入され、K君お手製の簡易孵卵器で5個の孵化に成功したそうだ。K君はこの夏休み、やがて孵化する弟妹たちの世話に忙しくなりそうだ。K君に助言と指導をしたWレンジャーは「K君は人の話をよく聞き、よく観察することの出来る子どもさんです。自然を見て、知って、学ぶことが守ることに繋がり、強いては命の尊さを知ることになるのでは」と話している。今回ウズラを通して生命誕生の素晴らしさを体験したK君、これからも自然から学びつづける少年であれ。

K君は将来レンジャーになりたいそうだ。ガンバレ！未来の自然科学者、K君。 （土×土）